

本書では、1980年代から2010年代にかけて商業におけるインテリアデザイン界の動きを振り返ってきた。91年にモダニズム建築への批判を込めた「M2ビル」でデビューした建築家、隈研吾は日本のインテリアデザインをどのように見ていたのか。「80年代の日本のインテリアデザインは世界から見てもかなり特別な時代（場所）だった」と隈は指摘する。そして、「インテリアデザインの批評性が建築の世界を動かし」と、だが90以降、建築に対する批判という役割を失った日本のインテリアデザインはどこへ向かうのだろうか。

【総評編】隈研吾

21世紀の金融資本主義の中で インテリアデザインがブランディングの一装置となる

インテリアデザイナーという職能の誕生

本書の序章で時代を記録し、文化を築いてきた専門誌『商店建築』『リビングデザイン』『インテリア』『SD』を紹介した。そして、1981年に「ローブドシャンブル」でデビューした近藤康夫から始まり、飯島直樹、河崎隆雄、野井成正、岡山伸也、間宮吉彦、橋本夕紀夫、小泉誠、五十嵐久枝、グエナエル・ニコラ、文田昭仁、辻村久信、トネリコ（米谷ひろし）、君塚賢、増子由美）、藤原敬介、クライン・ダイサム・アーキテクト（アストリッド・クライン、マーク・ダイサム）、トラフ建築設計事務所（鈴野浩一、禿真哉）、中村拓志、青木淳へ取材し、執筆してきた。

80年代は倉俣史朗がトップランナーで、世界からも注目され、その後を第三世代の内田繁、杉本貴志らが、さらにその後を第四世代の近藤康夫、飯島直樹、河崎隆雄らが追隨していた。日本のインテリアデザインの歴史は、第一世代の剣持勇、渡辺力らが戦後このジャンルを切り開き、うまいかたちでバトンを受けたのが、第二世代の境沢孝、倉俣史朗、北原進らの世代である。剣持らが58年に日本インテリアデザイナー協会（当初は日本室内設計家協会）を設立し、インテリアデザイナーが建築家と対等に仕事をすることを望み、剣持は雑誌メディアなどを通して著名建築家を巻き込み、60年代に「インテリア論争」へ